

中学校知的障害特別支援学級における 自己理解を育むキャリア教育

－「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める
自立活動の実践－

内容の要約

中学校学習指導要領総則(平成29年3月)では、キャリア教育の充実について明記されている。本研究では、自分らしい生き方の実現を促すキャリア教育について、自己理解を育むことが重要であると考えた。

そこで、「他者との関わり」という視点から「過去、現在、未来という時間的なつながり」における自己の変容を検証するため、「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める自立活動の実践を行った。その結果、生徒は今の自分を見つめ直し、自分のよさに気づき、自己を肯定的に理解し、自分らしい生き方について主体的に考える基盤ができた。

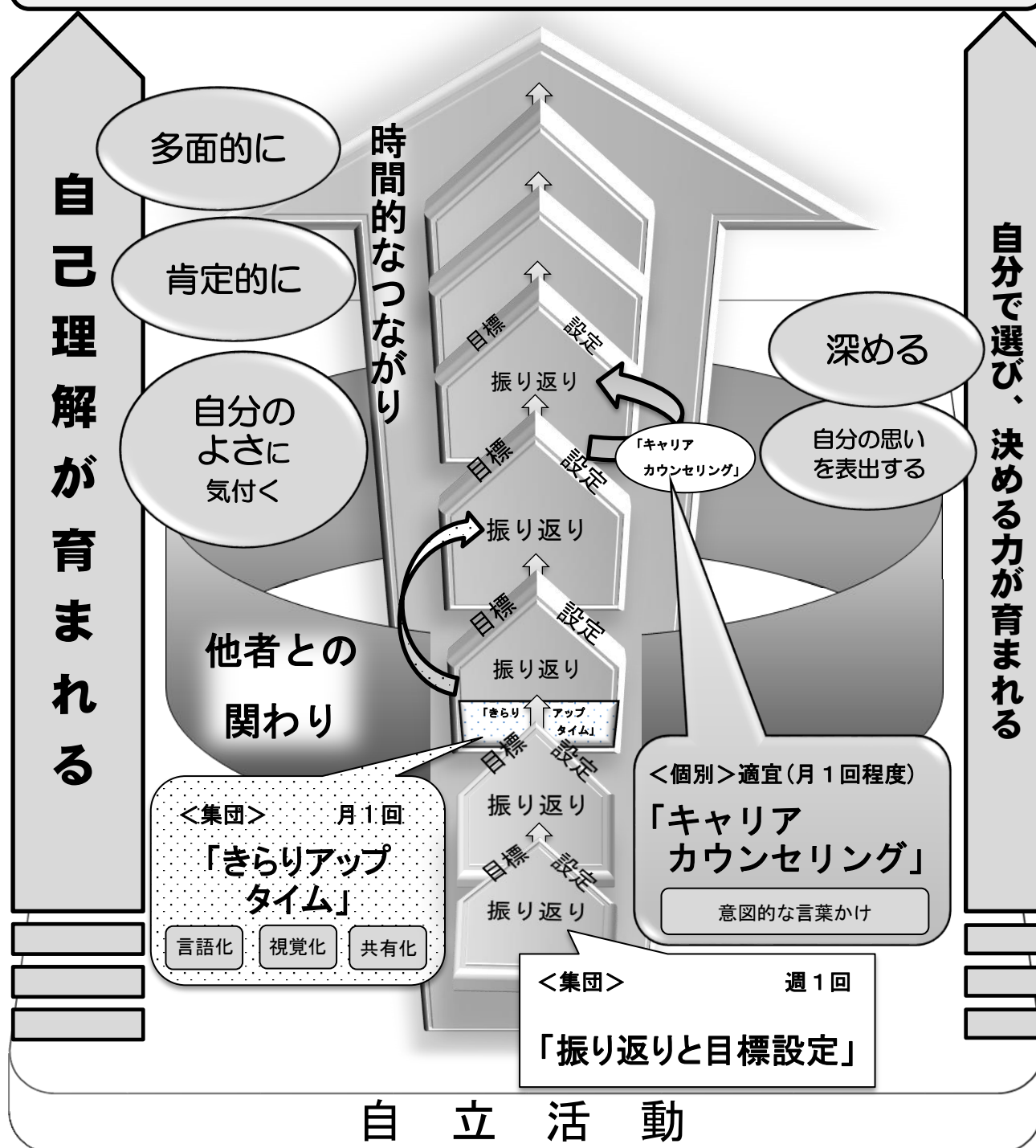
キーワード

自己理解 「過去、現在、未来という時間的なつながり」 「他者との関わり」
「振り返りと目標設定」 「きらりアップタイム」 「キャリアカウンセリング」

目 次

I 主題設定の理由	(1)	VI 研究の内容とその成果	(4)
II 研究の目標	(1)	1 授業計画の全体像	(4)
III 研究の仮説	(2)	2 具体的な実践	(5)
IV 研究についての基本的な考え方	(2)	3 三つの活動を関連付けた自立活動の	
1 自己理解	(2)	成果	(8)
2 自己理解を育むためのキャリア教育	(2)	VII 研究のまとめと今後の課題	(10)
3 教育課程での位置付け	(3)	1 研究のまとめ	(10)
V 研究の進め方	(4)	2 今後の課題	(10)
1 研究の方法	(4)	文 献	
2 研究の経過	(4)		

自分らしい生き方について主体的に考える



背景

- キャリア教育を、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とし、キャリア発達は、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」としている【平成23年中央教育審議会答申】
- キャリア教育の充実を図り、その中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるようにすることが示されている【平成29年中学校学習指導要領総則】
- 「自己の理解を深め、自己肯定感を高めるとともに、得意不得意等に係る意志を表明する力を育み、主体的に学ぶ意欲を一層伸長するなど、発達の段階を踏まえて自立活動の内容を改善・充実することが必要である」【平成28年中央教育審議会答申】

特別支援教育に関する研究

中学校知的障害特別支援学級における 自己理解を育むキャリア教育

－「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める
自立活動の実践－

I 主 題 設 定 の 理 由

キャリア教育は、平成23年1月に中央教育審議会から出された答申(以下、平成23年の中教審答申という。)にて、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」¹⁾であると定義され、キャリア発達は、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」¹⁾とされている。「キャリア」については、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」¹⁾と規定されている。また、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力としては、「基礎的・汎用的能力」が挙げられており、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の四つの能力で定義されている。

中学校学習指導要領総則(平成29年3月公示)では、キャリア教育について明記され、キャリア教育の充実を図り、その中で、生徒が自らの生き方を考え、主体的に進路を選択することができるようにすることが示されており、キャリア教育の重要性が高まっている。

また、平成28年12月に中央教育審議会から出された答申では、自立活動の項目に、「自己の理解を深め、自己肯定感を高めるとともに、得意不得意等に係る意志を表明する力を育み、主体的に学ぶ意欲を一層伸長するなど、発達の段階を踏まえて自立活動の内容を改善・充実することが必要である」²⁾とされている。

平成23年の中教審答申に先立ち、当センターの平成22年度特別支援教育に関する研究では、特別支援学校高等部において「マイライフドリームプラン」を作成する学習活動に取り組み、自己理解を深めることを通して、自分らしい生き方である自分の夢や希望をえがく生徒の姿がまとめられている。

このような国の動向や当センターの研究の経緯を踏まえて、自分らしい生き方の実現を促すキャリア教育について、本研究では、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力である「基礎的・汎用的能力」の中でも、特に自己理解を育むことが重要であると考えた。そこで、自己理解を育むために、自立活動における実践を行うこととした。中学校知的障害特別支援学級において、「他者との関わり」という視点から「過去、現在、未来という時間的なつながり」における自己の変容に気付けるようにするために、三つの活動を考えた。具体的には、生徒が1週間を振り返り、次の目標を自分で立てる活動である「振り返りと目標設定」を実施し、この取組を深めるため、友達や教員から自分のよさを教えてもらい、自分のよさに気付く活動である「きらりアップタイム」と、自分らしい生き方についての思いを深め、自分で決める力を育む活動である「キャリアカウンセリング」を取り入れる。これら三つの活動を関連付けて取り組むことを通して、生徒が、自分のよさに気づき、自己を肯定的に理解し、自分らしい生き方について主体的に考えていく姿を目指し、本主題を設定した。

II 研 究 の 目 標

中学校知的障害特別支援学級において、「他者との関わり」という視点から「過去、現在、未来とい

「時間的なつながり」における自己の変容を検証するために、「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める自立活動の実践を展開することで、自己理解を育み、生徒が自分らしい生き方について主体的に考えていく姿を目指す。

Ⅲ 研 究 の 仮 説

「他者との関わり」という視点から「過去、現在、未来という時間的なつながり」における自己の変容に気付けるようにするために、「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める自立活動の実践を展開する。そうすることで、生徒は自分のよさに気づき、自分を肯定的に理解する力を付けていくだろう。さらに、こうした過程において、自己理解が育まれ、自分らしい生き方について主体的に考えていけるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 自己理解

本研究において、自己理解とは、今後の自分自身の可能性を含めて、自分を肯定的かつ多面的に理解していることと捉える。具体的な状態としては、「過去」の自分を振り返って「今」の自分のよさに目を向けられることや、「今」の自分のよさを生かして「これから」の自分についての目標を立てられることとする。

2 自己理解を育むためのキャリア教育

(1) 自己理解を育むための視点

キャリア教育は、キャリア発達を促す教育とされ、一人ひとりの発達や社会人・職業人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものとされている。そのことから、発達の視点を取り入れ、「今」の自分を中心にし、「過去」の自分からの積み重ねと、「将来」の自分へのつながりを重要視することが大切であると考えられる。

また、キャリア教育の「キャリア」とは、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」¹⁾と言われていることから、キャリア発達を促すためには、「他者との関わり」が鍵となる。

そこで、「他者との関わり」という視点から「過去、現在、未来という時間的なつながり」における自己の変容に気付けるようにするために、手立てを工夫し、生徒の変容について検証する(図1)。なお、本研究での他者を、特別支援学級の友達や教員、授業に関わりのある教員とする。

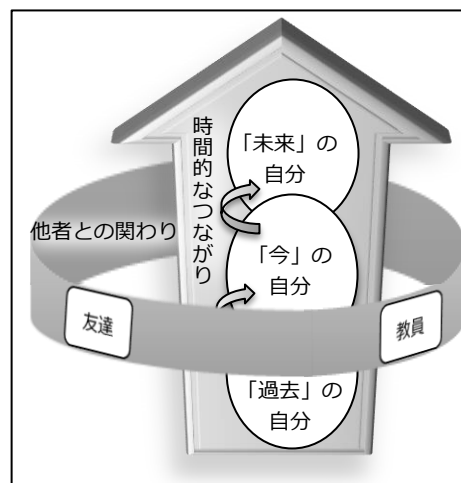


図1 自己理解を育むための視点

(2) 関連付けた三つの活動

ア 「振り返りと目標設定」

本研究では、1週間の学校生活全般を通して、週末にまず振り返りをし、次の目標設定をする。「過去」から「今」までの自分を振り返って、それを生かして「未来」の目標につなげることを繰り返すことで、生徒は「今」の自分のよさに気付いていくことができると考える。同じサイク

ルを繰り返して積み重ねることで、知的障害のある生徒が、少しずつ本当の自分の思いを表出し、自分らしい生き方について主体的に考えることができるようになる。

イ 「きらりアップタイム」

「きらりアップタイム」とは、自分のよさに気付く活動である。生徒のよい面を生徒同士が伝え合ったり、教員が生徒に伝えたりする(図2)。友達や教員から教えてもらうことで、自分では気付きにくいよさについても気付ける。月に1回、「振り返りと目標設定」で振り返ったことを、さらに深めて、生徒が自己を肯定的かつ多面的に理解する活動とする。

	生徒	教員(司会)
話し合い	・授業で気付いた「なるほど」、「そうか!」というような友達とのよさを出し合う	・思いを引き出し、言語化し、生徒同士の意見をつなぐ ・意見をホワイトボードに書く
記入	・友達のどの発言や姿がよかったのか、具体的に「○○さんへの手紙」という形式でメッセージを書く	・生徒と同様に、メッセージを書く ・伝え方について、アドバイスをする
共有	・メッセージに書いてもらったことを読み合う	・メッセージを読むとともに、画用紙に貼ることで、全員での共有を図る

図2 「きらりアップタイム」の手順

ウ 「キャリアカウンセリング」

「キャリアカウンセリング」は、生徒が自分らしい生き方について、思いを深め、自分で決める力を育む活動である。教員は、生徒の「今」の自分についての思いや、「これから」の自分についての願いを引き出し、月に1回程度、個別面談の形態で行う。「キャリアカウンセリングシート」(図3)の項目を念頭に置くことで、教員が意図的な言葉かけを行うことができる。知的障害のある生徒の思いを引き出すために、実態に応じて、シートを活用して文字によるやり取りをしたり、活動の様子が想起できる写真や思いを書き表しやすいイラストを使ったりする。「振り返りと目標設定」で出し切れなかった自分の思いを、教員とやり取りをしながら掘り下げる活動とする。

キャリアカウンセリングシート		作成者:
生徒の現状		
目標		
☆ 不安はないか? 目標達成の見通しは?		
誰が	生徒	教員
いつ(いつまでに)		
何を		
どのように(場)		
(程度)		
次回に向けて		
生徒の思いや願い		教員の思いや願い

図3 「キャリアカウンセリングシート」

3 教育課程での位置付け

知的障害のある生徒には、全般的な知的発達の程度や適応行動の状態に比較して、言語、運動、情緒、行動等の特定の分野に、顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態が、知的障害に伴って見られる。そのような障害の状態による困難の改善等を図るために、自立活動の指導を効果的に行う必要がある。

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領によると、自立活動は、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」³⁾ことを目標にした、特別支援学校の教育課程において特別に設けられた領域である。自立活動の指導内容には、六つの区分(「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」)の下に示された26項目があり、生徒の実態に応じて必要な項目を選定して取り扱うものである。「人間関係の形成」では、自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、集団の基盤を培う観点から、四つの内容(「他者とのかかわりの基礎に関すること」「他者の意図や感情の理解に関すること」「自己の理解と行動

の調整に関すること」「集団の参加の基礎に関すること」)を示している。自分らしい生き方について主体的に考える生徒を育てるという本研究の目標は、この自立活動の目標とも重なると考えられる。また、前述した平成28年の中央教育審議会答申を踏まえて、本研究での三つの活動を自立活動に位置付けて、自己理解を育むこととする。

本研究では、第2学年の生徒を研究対象として、個々の生徒の実態に応じた指導目標や指導内容を考えたうえで、自己理解を育むことを通して、生徒が自分らしい生き方について主体的に考えられるようにしたい。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 研究対象は、研究協力校の知的障害特別支援学級の生徒と担任教員とする。研究協力校教員から生徒の実態を聞き取り、把握する。
- (2) 聞き取った内容を分析し、指導目標を明らかにする。
- (3) 「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める自立活動の授業計画を提案する。
- (4) 本研究での実践によって、生徒が自分のよさに気づき、自分らしい生き方についての思いを表現できたかどうかを、教員から聞き取り、明らかにする。その際、教員が生徒を見る観点として、「できた」「分かった」という結果を見るのではなく、「やりたい」「なりたい」といった意欲や態度、日常生活での行動等の変化を見るように意識する。
- (5) 三つの活動を関連付けて取り組むことで明らかになった成果と課題をまとめ、「中学校知的障害特別支援学級における自己理解を育むキャリア教育の年間計画(第2学年) 試案」を作成する。

2 研究の経過

4月 5月	研究構想、研究推進計画の立案 第1回専門・研究委員会 (研究構想)	9～10月 10月	研究協力校における実践 第3回専門・研究委員会 (研究の成果と課題の分析)
6～7月 8月	研究協力校における実践 第2回専門・研究委員会 (自立活動の授業計画の検討)	11月～12月 1月 2月 3月	研究論文原稿執筆 研究発表準備 研究発表大会 研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 授業計画の全体像

(1) 各校の実態

A校の研究対象とする学級には、4月当初は第2学年の生徒が1名だけ在籍していた。2学期に第1学年の生徒が1名転入して2名となったが、生徒と担任教員(以下、教員という。)が一对一で話し合う機会が多い。そこで、A校での実践を、「他者との関わり」の他者が主に教員となる場合とした。また、A校に在籍する第2学年の生徒を生徒Aとした。

B校の研究対象とする学級には、第2学年の生徒が4名、第3学年の生徒が1名在籍している。特別支援学級の友達と関わるが多く、自分で自分を振り返るだけでなく、友達との関わりを通して、友達の言葉をきっかけに、自分についての理解を深める機会が多い。そこで、B校での実践を、「他者との関わり」の他者が主に学級の友達となる場合とした。また、B校に在籍する生徒を、生徒B、生徒C、生徒D、生徒E、生徒Fとした。

(2) 三つの活動の関連について

自立活動の時間を設定し、「振り返りと目標設定」、「きらりアップタイム」、「キャリアカウンセリング」を行う(図4)。

「振り返りと目標設定」は週末に行い、生徒が、がんばった自分を見つけることや、次の活動に向けての意欲をもつことを目指す。ワークシート「1週間振り返りシート」を使い、1週間の生活や授業等から、がんばったこと(「きらりポイント」)、もう少しがんばりたいこと(「チャレンジポイント」)を考える(図5)。その後、「友だちへのメッセージ」を書き、渡し合う。自分のワークシートに友達からもらったメッセージを貼る。そして、来週の予定表を基に次の目標を考え、「自分宣言」として発表する。

「きらりアップタイム」で、生徒は自分のよさに気付き、さらに「キャリアカウンセリング」で、自分の目標を確かなものにす。知的障害のある生徒が、自分の思いを掘り下げて目標を決めたり、達成していくための細かな段階を考えたりすることは難しいと考えられるので、「キャリアカウンセリング」を適宜設定し、生徒と教員が一緒に振り返りをして、目標に向かう生徒の思いを引き出す。

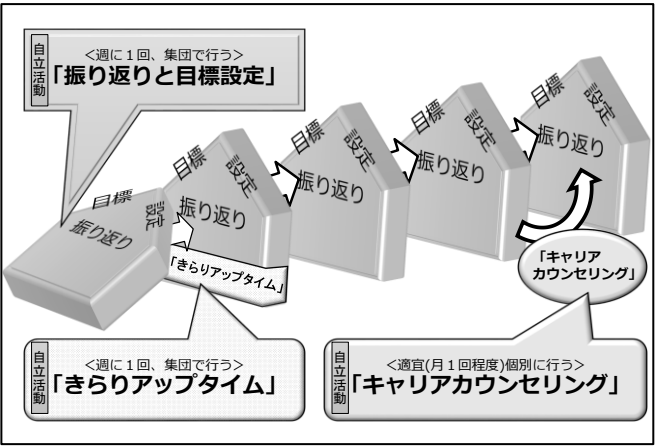


図4 三つの活動の関連を表した図

学習活動	指導上の留意事項
◆ワークシート「1週間振り返りシート」を使って、「きらりポイント」、「チャレンジポイント」を考えて、書く。 ◆書いたことを発表する。 ◆「友だちへのメッセージ」を考えて、書く。 ☆Aさんへ 交歓スポーツ大会では、100m走をあらかじめ最後までがんばって走っていたね。すごいと思ったよ。 ◆「友だちへのメッセージ」を渡し合う。 ◆来週の予定を見て、来週の目標を話し合う。 ◆来週の分のワークシートを使い、「自分宣言」の部分を書く。	・今週の目標は、先週に立てた自分宣言とする。 ・「きらりポイント」に「こんなふうにはたらきかける。た。気持ちで取り組んだこと。」「チャレンジポイント」うしてみたいな」という。 ・「きらりポイント」の ・「友だちへのメッセージ」のよさを活かすところを ・「友だちへのメッセージ」を伝え合うようにする。さらに、言葉を補い、生徒の実感に活かされるよう ・自分宣言では、「～しな」と、目標を肯定的に考えられるようにはたらきかける。

振り返り

目標設定

1週間振り返りシート

平成 年 月 日

名前

自分宣言

前回の授業で考えた自分宣言(目標)

きらりポイント

がんばったこと

チャレンジポイント

もう少しがんばりたいこと

友だちへのメッセージ

友だちからもらったメッセージ

1週間振り返りシート

平成 年 月 日

名前

自分宣言

次の目標

図5 「振り返りと目標設定」の学習展開例(一部)

2 具体的な実践

(1) 「他者との関わり」の他者が主に教員である場合

ア 生徒の実態と自立活動における指導目標

生徒Aの自立活動の個別の指導計画を検討すると、6区分26項目の内容項目のうち「人間関係の形成(自己の理解と行動の調整に関すること)」において、自分のことについて理解が十分でないことがあるという実態が見られた。このような実態から、「自己を理解し、状況に応じて行動できるようになる」という指導目標を取り上げた(図6)。

生徒の実態の概要	人間関係の形成
	・自分のことについて、理解が十分でないことがある ・教員の問いかけに応じて、具体的に返答することにより、理解が進むことがある ・人と関わることが好きであるが、相手の気持ちを推し量って行動するというよりも自分中心で行動してしまうことがある
指導目標	・自己を理解し、状況に応じて行動できるようになる

図6 生徒Aの自立活動の指導計画(抜粋)

イ 取組を通して見られた姿

2学期に入り、生徒Aは、「交流学級に一人で行きたくない」と発言したり、宿題を忘れたりすることが続いた。教員は、自分の話をもっと聞いてほしいという思いからではないかと推測し、タイミングを逃さず、本音が話せるよう、「キャリアカウンセリング」を実施した(図7)。

「先輩として、(今の自分の姿について)どう思う?」という教員の問いかけに、生徒Aは「だめだと思う」と答えた。教員は、生徒Aが年下の子どもと関わることが好きであり、関わり方も上手であるという本人のよさを生かして、「後輩に、先輩として教えてあげてほしい」という期待を伝えた。認定子ども園における職場体験でのがんばり、以前は宿題をやっていたことや交流の時間にも一人で行っていたことを一緒に振り返りながら、がんばっていた自分に気付けるよう対話を重ねた。その中で、生徒Aは「そうやったな」と嬉しそうな表情を見せた。

しばらくは「宿題を忘れた」ということが続いたが、「キャリアカウンセリング」から2週間後の「振り返りと目標設定」の時間に、「宿題を家でやってきて、先生に出します」とチャレンジポイントに書き、目標を宣言した。「きらりアップタイム」では、生徒Aが立てた目標について、友達からも教員からも褒めてもらえた。

すると、次週に、自分から教員に「先生、“今日のgood”(自分のよいところ探しをする学級独自の取組)しないの?」と伝え、自分のがんばりを聞いてほしそうにした。「振り返りと目標設定」では、「チャレンジポイント」に「宿題を、わすれず、先生に、だすのをがんばったら、よかったです」と書き、「今」よりもさらに前向きにがんばろうとする気持ちを伝えた。

ウ 取組の分析とその成果

生徒Aの発言には、一貫して「先生に」という言葉が見られ、教員の支えをよりどころにしながら前向きに目標を立てている様子が伺える。

このように、生徒の気持ちを前向きに導いた効果的な教員の働きかけは、次の4点だと考える。1点目は、生徒の発信を敏感に捉え、タイミングを逃さずに「キャリアカウンセリング」を実施し、思いを出せるようにしたことである。2点目は、「キャリアカウンセリング」で、「今」のできていない姿ではなく「過去」のがんばっていた姿に着目して、生徒自身が自分のよさに改めて気付けるようにしたことである。さらに、対話を重ねて生徒の思いを引き出し、これからの目標を具体的に考えられるようにしたことである。3点目は、本人のよさを生かした学級における役割と、期待しているというメッセージを伝えたことである。4点目は、できた・できないではなく、こうなりたいという思いやがんばっている過程を褒めたことである。

その結果として、「教員との関わり」から「過去、現在、未来という時間的なつながり」にお

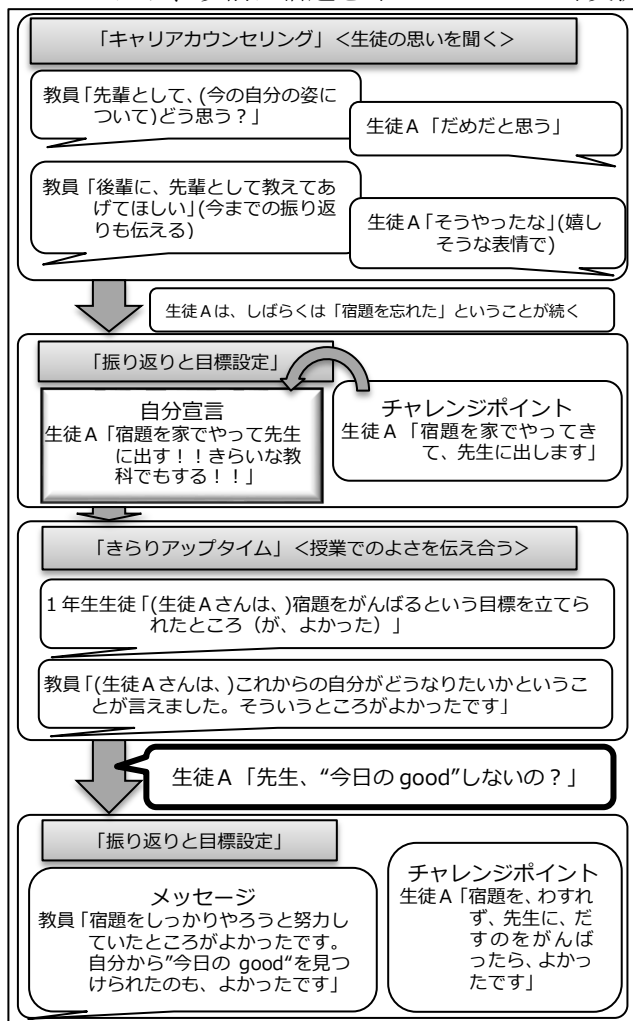


図7 生徒Aの取組を通して見られた姿(一部筆者加筆)

ける自己の変容について気づき、「過去」の自分を肯定的に捉え、「今」の自分を見つめ直すことができた。さらに、「今」の自分を肯定的に理解し、「これから」の自分について前向きに考えることができた。

(2) 「他者との関わり」の他者が主に学級の友達である場合

ア 生徒の実態と自立活動における指導目標

生徒Bは、日常会話に支障はないが、自分の思いや考えを言葉として表出するところに苦手意識がある。また、卓球部に所属していて、友達からは卓球が得意と言われているにもかかわらず、「自分は下手」と発言し、自分のよさには気付いていないところもある。このような実態から、「人間関係の形成(自己の理解と行動の調整に関すること)」に関する指導を優先的に行うことが必要であると感じ、「自分のよさに目を向け、気付くことができる」という指導目標を取り上げた(図8)。

生徒の実態の概要	人間関係の形成
	・教員や友達は卓球が上手であると捉えているが、「私は下手」と発言している。また、自分は何もできないと思っているところもある。自分のよさには気付いていないところもある
指導目標	・一方で、学級の友達のよさには気付くことができ、発表する等して伝えることができる
	↓
指導目標	・自分のよさに目を向け、気付くことができる

図8 生徒Bの自立活動の指導計画(抜粋)

イ 取組を通して見られた姿

「振り返りと目標設定」では、1週間の中でがんばったことを振り返り、学級全員でがんばったことを伝え合った。

授業の始めの場面(図9の①)では、生徒Bは、生徒Cや生徒Dからは、「スマッシュがとても強かった」「(優勝した生徒の)サーブ(を)、返せるなんてすごい」などと技術面を褒められたり、相手が誰であろうが真剣で負けず嫌いという取組の姿勢について感心されたりし、「うん、すごい」と自分でもつぶやいた。表情はあまり変わらず、淡々とした受け答えのように見えた。教員は、生徒達が発言した言葉を復唱しながら、黒板に書き留めていった。

その後も、他生徒が自分の言葉で生徒Bの活躍を褒めることが続き、図9に示すように、他生徒が気付いた生徒Bのよさがたくさん集まった。こうした中で、生徒Bからの発言が増えた。生徒Bは、「チャレンジポイントも書いたよ。サー

授業のめあて

・目標に沿った振り返りを通して、がんばった自分を見つける

・今週の自分を生かして、予定表から来週の自分を考えられる

(生徒Fは欠席) (生徒Bが先週立てた目標「卓球大会をがんばる」)

① 生徒B、C、D、教員の関わり

教員「生徒Bさんのよかったところを思い出して、発表してください」

生徒D「相手が初心者でも、スマッシュがとても強かった」

教員「容赦なく、スマッシュ」<板書>

生徒D「生徒Bは、負けず嫌いです。この写真は、〇〇(優勝した生徒)と戦ったときの写真で、俺と生徒Bと2人で、〇〇を倒そうって戦っているとき」

教員「負けず嫌い」<板書>

教員「生徒Cさん、どう？」

生徒C「〇〇(優勝した生徒)のサーブ、返せるなんてすごいなと思った」

教員「〇〇さん(優勝した生徒)のサーブを打ち返した」<板書>

生徒B「うん、すごい」

(生徒Bは、あまり表情を変えずに、淡々と答えた)

② 生徒B、C、D、教員の関わり

生徒B「えっと、(きりポイント)緊張しないで、勝てるようにがんばってやった。チャレンジポイントも書いたよ。サーブ、人が取れないサーブを入れて、スマッシュを打ち返したい。カットとか、スマッシュを入れるようにしたい」

生徒D「生徒Bは卓球部だから、大人げなかったって言うか、スマッシュとか入れられてよかったよね」

生徒C「生徒Bだけじゃない。(スマッシュを打ってきたのは)向こうの学校も同じだった」

生徒B「(私の)スマッシュとかあまり入らなかったもん」

生徒D「生徒Bのスマッシュ、たくさん入っていたな。火の玉に見えた」

生徒C「すごいんじゃない。卓球やってなかったら、絶対あんなふうにはできなかったよね」

(生徒Bは、褒められて、嬉しいけれど照れているような様子が見られ、授業後に、満足そうな表情を浮かべながら、教員と話し合う姿が見られた)

生徒B

ようやなく
スマッシュ
負けず嫌いで
がんばってた
さすが卓球部
〇〇のサーブを
打ち返した
やっつけるオーラ
さんちゅうせよ勝てる
ぶつにがんばった

図9 取組を通して見られた姿(下線は筆者、一部筆者加筆修正)

ブ、人が取れないサーブを入れて、スマッシュを打ち返したい。カットとか、スマッシュを入れるようにしたい」とこれからの目標を宣言した。また、「スマッシュとかあんまり入らなかったし」と、みんなから褒められても純粋に喜ぶ気持ちにはなれなかった悔しさも言えるようになってきた。さらに、教員の復唱や橋渡しの言葉かけがなくても、生徒同士での対話が重ねられ、「火の玉に見えた」「卓球やってなかったら、絶対あんなふうにはできなかった」と生徒Bのよいところを生徒達が膨らませて発言するようになった。このような生徒同士の関わりの中で、生徒Bの表情はにこやかになり、満足そうな様子も伺えた。

ウ 取組の分析とその成果

他生徒から褒められてもあまり嬉しそうな様子が見られなかったのは、卓球部に属する生徒Bにとっては、別にそれくらいいたいたことはない、できて当たり前のことという認識だったのかもしれない。他生徒から、いろいろな言い方で褒められたことによって、自分がやってきたことについて、がんばった自分を実感することができたのではないかと考える。

このように、生徒同士で対話を深め、生徒自身の気づきを引き出した効果的な教員の働きかけについて整理すると、次の3点が考えられる。1点目は、その場面を想起しやすい写真を活用し、具体的なことがらに基づいた話ができるようにしたことである。2点目は、教員が生徒同士のやり取りの橋渡しを行い、生徒たちがそれぞれの思いを自分の言葉で伝え合えるようにしたことである。3点目は、教員が生徒の発言を復唱しながら板書をし、言葉でフィードバック(言語化)し、さらに視覚化することによって、生徒間の共有化を図ったことである。

その結果、生徒は自己を多面的に捉え、今まで意識していなかった自分のよさに気付くことができ、さらに、これからこうしたいという次の目標へとつなげることができたと考えられる。

3 三つの活動を関連付けた自立活動の成果

(1) 三つの活動の効果

「過去、現在、未来という時間的なつながり」における自己の変容を「他者との関わり」から検証するために、「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める自立活動の実践をしてきた。

その効果として、以下のことが挙げられる。

「振り返りと目標設定」に毎週繰り返し取り組んだことによって、生徒は、見通しをもって活動することができるようになった。その中で、自分のよさに気付く嬉しさを実感し、目標を自分で考えて決められるようになってきた。

毎週行う「振り返りと目標設定」の後に「きらりアップタイム」を定期的に月1回行うことによって、友達や教員から生徒のよさをより多く伝えることができ、生徒は、自己を肯定的かつ多面的に理解することができた。

「キャリアカウンセリング」を必要なタイミングで行うことによって、生徒の発信を見逃さずに受け止めることができ、生徒は、言葉に表しきれなかった思いを教員に伝え、気持ちを整理し、自己を肯定的に捉え直すことができた。そして、目標についても自分のものとして主体的に考えることができた。また、「振り返りと目標設定」を受けて「キャリアカウンセリング」を設定することにより、生徒は、「振り返りと目標設定」で立てた目標を教員と一緒に見直ししながら、その目標に向かうスモールステップを具体的に考えることができた。

その結果、これらの三つの活動を関連付けて、繰り返し取り組むことにより、生徒は、今の自分を見つめ直し、自分のよさに気づき、自己を肯定的に理解し、自分らしい生き方について主体的に考える基盤ができたと考えられる。

(2) 自己理解を育むキャリア教育の年間計画

研究協力校2校では、職場体験を7月に実施された。職場体験は、自分の役割を職場の人との関係の中で果たし、得られた達成感を基に、さらに自分らしい生き方について主体的に考えていくきっかけとなる貴重な取組である。そのため、1学期は職場体験を軸にして単元計画を考え、中期目標を「人の役に立てたという実感をもつ」と設定して取り組んだ。1学期の取組を通して、職場体験における個々の目標を具体的に考え、「過去」の自分と比べた「今」の自分に自信をもち、「未来」の自分についての夢や希望をえがくこともできた。

一方で、自分のよさに気付き、自己を肯定的に理解するための学習の時間が十分に取れず、個々の目標について、自分のよさを生かして考えるというところまでは迫りきれなかった。

そこで、2学期の取組は、生徒が自分のよさに気付き、「自分のよさを伸ばそうとする」ということを中期目標に設定し、三つの活動を関連付けて展開した。図10は、本研究で取り組んできた1学期、2学期をまとめ、作成した「中学校知的障害特別支援学級における自己理解を育むキャリア教育の年間計画(第2学年) 試案」である。

今後、本研究において検証できていない第2学年の3学期を含む第2学年の年間計画、さらには、第1学年から第3学年までの3か年を見通した年間計画を基に、体系的に取り組んでいくことが必要である。

中学校知的障害特別支援学級における自己理解を育むキャリア教育の年間計画（第2学年） 試案				
ねらい（長期目標）		自分らしい生き方について主体的に考える生徒の育成		
月	中期目標	自立活動での取組	各時間における目指す生徒の姿	主な行事
4月		生徒のよさが見られる場面の写真や作品を掲示しておく、互いのよいところを見つけやすくなる		
5月				
6月	人の役に立てたという実感をもつ	わたし、あなたのよいところを見つけよう 「きらりアップタイム」 未来の自分を考えよう 働く大人にインタビュー 職場体験の目標を考えよう 「キャリアカウンセリング」 事前訪問についての振り返りと職場体験への目標確認 「きらりアップタイム」	友達が見つけた「自分のよさ」に新たに気付くことができる 多様な考えにふれ、自分のよさに気付く 「働く」、「暮らす」、「楽しむ」という三つの観点で将来の自分のことを考える 働くことや仕事をするとは、人の役に立つことであるということが分かる 職場体験の目標を明確にし、職場体験に向けての意欲を高めることができる 職場体験の目標を具体化できる 意欲をもって、職場体験に向かう 事前訪問でがんばったことを互いに励まし合う	事前訪問
7月		職場体験についての振り返りと次の目標設定 「きらりアップタイム」	職場体験を振り返って、学校での生活を向上させようとする 職場体験でがんばったことから、互いのよさを伝え合う	職場体験 三者懇談会
8月		生徒が自分の言葉で、がんばったことや今後の夢・希望を親に伝える場を設定する		
9月	自分のよさを伸ばそうとする	「キャリアカウンセリング」 「振り返りと目標設定」① 「振り返りと目標設定」② 「振り返りと目標設定」③ 「振り返りと目標設定」④ 「きらりアップタイム」	2学期にがんばりたいことを言える 1学期を振り返り、2学期の目標を立てる ①の目標を振り返り、来週の目標を立てる ②の目標を振り返り、来週の目標を立てる ③の目標を振り返り、来週の目標を立てる 友達や教員の発言から、新たな自分のよさに気付く	体育大会 ブロック交流会（野外活動）
10月		「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深められるよう、関連付けながら、繰り返し取り組む		

図10 自己理解を育むキャリア教育の年間計画(第2学年) 試案

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 「他者との関わり」という視点から手立てを工夫することにより、生徒は、「過去、現在、未来という時間的なつながり」における自己の変容にさらに気付くことができ、自己を肯定的に理解することができた。
- (2) 「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める自立活動の実践に繰り返し取り組んだことで、生徒は、自分のよさに気付き、自己理解が育まれ、自分らしい生き方について主体的に考える基盤ができた。

2 今後の課題

- (1) 自己理解を育むキャリア教育を推進するためには、今後、第1学年から第3学年までを体系的に捉えた年間計画を作成し、検証する必要がある。
- (2) 今後は、三つの活動の関連付けをさらに効果的にするために、学校の実情に応じて、自立活動へどう位置付けていくのか、検証を重ねる必要がある。

文

献

- 1) 文部科学省中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」、平成23年(2011年)
 - 2) 文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」、平成28年(2016年)
 - 3) 文部科学省「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」、平成21年(2009年)3月
- 滋賀県総合教育センター「自己の生き方について考える力を育てる学習活動のあり方―特別支援学校高等部における『マイライフドリームプラン』を作成する進路学習を通して―」、平成23年(2011年)
- 小島道生・片岡美華『発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育』、ジアース教育新社、平成28年(2016年)

専 門 委 員

滋賀県教育委員会事務局特別支援教育課主幹	尾代 恵子
長浜市教育委員会事務局教育指導課副参事	川崎 慶子
彦根市教育委員会事務局学校教育課主査	北川 尚樹

研 究 委 員

県内公立中学校教諭	柿木 澄子
県内公立中学校教諭	杉村加津美
県立特別支援学校主幹教諭	田中 敦司
県立特別支援学校教諭	山口 有子

研 究 協 力 校

県内公立中学校 2校